

西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一
考察

宗意, 和代 / Motoi, Kazuyo

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / 国際日本学論叢

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

五四(39)

(終了ページ / End Page)

三三 (60)

(発行年 / Year)

2014-03-18

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009676>

平成25年度 国際日本学論叢第11号 2014年3月18日発行 抜刷

論文

西洋女性の読書に見る
ロマンチックラブの一考察

社会学専攻博士後期課程三年

宗 意 和 代

西洋女性の読書に見る ロマンチックラブの一考察

社会学専攻博士後期課程3年

宗 意 和 代

恋愛の発見

西洋文学の恋愛は『トリスタン・イゾー（1170～75頃）』に始まるといわれる。愛の媚薬によって激しい恋に落ちた、王の甥トリスタンと王妃イゾーの悲劇は中世の叙情詩人トルバドゥールたちによって語り伝えられた。トルバドゥールたちの多くは王侯身分や騎士であり、彼らは主に若い騎士が貴婦人の愛を求めるといふ宮廷風恋愛叙事詩を作り上げた。

「恋愛は十二世紀の発明である」とは、歴史家シャルル・セニョボス（1854～1942）の言葉である。フランスの歴史家ラ・クロワ『中世のエロティシズム』には「十一世紀末に南仏で女性に対する恋愛感情が発見された」とある。ホイジンガも「十二世紀は他に例を見ないほど、創造的で造形的な時代」であり、「愛欲（エロティック）の形式」も創造されたと言っている（増田，1970）。「恋愛」という感情は、物語において創造されたところから始まったか、あるいは物語において確認されたところから始まったか、いずれかのようなものである。

当初カトリックの影響から野蛮なものと思われていた「恋愛」の感情を、トルバドゥールは新たな価値あるものに仕立て上げた。彼らがうたった宮廷風恋愛とは、婚姻としては実を結ばないが、かといって単なる戯

五四

西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一考察

れでもなく、現世で貫けば死に至るほかない究極の情熱恋愛であり、ここに中世西欧文学の「至純の愛Fin'amors（フィナモール）」として公の制度としての結婚と真っ向から対立する恋愛の表現が創り出された。

トゥルバドゥールは愛の喜び、愛による人格の向上、「愛の宗教」を唱え、女性を至福の源とし、憧憬と崇拜の念を抱いて、意中の既婚の貴婦人に奉仕する喜びをうたった。彼らのフィナモールは、南仏から北フランスへ、さらにイタリアへとうたいつがれ、やがて13世紀後半から14世紀、ダンテやペトラルカ、ボッカチオにも大きな影響を与えた。

トルバトゥールたちが歌の中で表現したフィナモールを具体的に理念化したのがアンドレアス・カペルラヌス『宮廷風恋愛の技術』（『愛の技法』と訳されることもある）である。ここでは、恋をする人間はそれだけで徳を高めることができるものとして、恋愛と欲望は切り離された。カペルラヌスは宮廷付き司祭でもあり、欲望から発する恋愛を徹底的に弾劾し、金品やセックスを目的とした恋愛は成立しえないものと断じたのである。

フィナモールは、結婚に結びつかない婚姻外の愛であり、今で言えば道ならぬ恋、つまり不倫である。言ってみれば『トリスタン物語』も不倫関係がそのテーマであるし、アーサー王伝説に登場するランスロとギネビアもまた不倫関係にある。

このカペルラヌスの書に則って、貴婦人たちの館では恋愛沙汰を裁く「愛の法廷」が開かれた。1174年5月3日の法廷で「真の恋愛は結婚したものの間にも存在しうるや？」の問いに伯爵夫人マリー・ド・シャンパーニュが「否」の判決を出したことが知られる（原野，2007：p.55）。中世においては婚姻外こそが、真の愛として公然と認められたのである。

ただし、現実には、そのような恋愛が行われていたのかといえ、そうではないらしい。

ジャック・ル＝ゴフは、宮廷風恋愛は文学の産物であり現実にはほとんど成立しなかったと言っている。

宮廷風恋愛は文学や絵画に存在するが、それは多くの芸術がそうであるように、理想とされながらも現実にはなしえないことだったからのようだ。

それでも、人々は物語において「真の愛」というものを理解した。

C・S・Lewis 『愛とアレゴリー』によれば、

生活と文学は分ちがたく結びついているものだ（中略）ある感情が最初に現れれば、それを表現すべき文学形式（“literature convention”）はじきに誕生するものであり、もし形式が先行すれば、それに従う人々は新しい感情をじきに学ぶものである（Lewis, 1972 : p.22）

要するに恋愛感情を抱いたのが先か、或いは文学として創作されたのが先かは定かでないが、いずれにせよ、その感情が知らしめられ、浸透し、定着する過程には物語が作用したということである。

つまりは、詩人たちは新しい「恋愛の範型」に対応する新しい恋愛感情に対して、ある意味では追従者であり、ある意味では先導者であったともいえる。中世において、何をもって「真の愛」とするかは、物語によった。そういうことは今においてもいえる。「恋愛の範型」をわれわれに与えているのは、映画や小説、あるいはドラマやマンガ、さらには流行歌の歌詞などの恋愛に関する「フィクション」、広い意味での「文学作品」であろう。現代のわれわれの恋愛観は、そうしたものに基づいている。

12世紀後半に活躍したトルヴェール クレチアン・ド・トロワ（Chretien de Troyes 1135～90?）の『クリジェス（Cligès）（1921）』と言う作品がある。『クリジェス』の女主人公フェニスが『トリスタン物語』のイズーを否定していることから「反トリスタン物語」という言い方もされている。「父の妻と恋におちる甥」という共通の設定にありながら、フェニスは、「私にはイズーのような生涯は我慢できません」と二人の男に所有されることを拒み、フィナモールでない夫に対して自らの貞操を守る。『ク

西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一考察

リジェス』は三角関係、果樹園、そして「薬」と『トリスタン』同様のキーワードを散りばめながらも独自の展開を見せる。

クレチヤン・ド・トロワの『クリジェス』は、「恋愛を発明した」と言われる12世紀西欧の代表的な恋愛ロマンスの一つとして、その独特の恋愛心理の描写で知られる。この作品では「恋愛」の感情が繰り返し確認されている。

モノローグの「だからといって私は彼を愛していると言っていいのだろうか（“Dirai ge por ce que ge l'aim ?”）」に始まり、「これは恋かしら？ええ、そう思うわ」（“Est ce Amors ? Oil, ce croi.”）「だからあなたさまは恋しておられるのです」（“Donc amez vos”）」、「あなたが恋していることを私は確信しています（“Vos amez, tote an sui certaine”）」と続く。ヒロインの関心はもっぱら自分の感情が「恋」すなわちフィナモールであるかに集中しており、相手に愛を告白したり、また愛しているかと問うようなセリフは見られない。

フェニス同様、当時の人々にとって、「フィナモール」と言う感情は実態のないものだった。この言葉の概念は、物語によって確認されて、その意味となっていたのであろう。

すなわち「恋愛」は恋愛物語において創造され、確認され、普及されたのである。そして、これ以後、西欧文学の重要なテーマとなっていく。中世において誕生した恋愛の文学形式（“literature convention”）は、今に至るまで踏襲されてきた。そして文学に恋愛の理想が追求されることも慣習的になっているといいだろう。

貸本屋の女性読者

五
一

中世において、結婚は義務と資産と結びつけて考えられるものであり、恋愛は婚姻では決して報われないが情熱的なものとされた。そうした考え

方は16世紀から17世紀、識字率の向上とともに現実的に受け入れられていった。印刷機は、シェイクスピアの戯曲やソネット、その他の愛の詩や物語をつぎつぎに印刷して世に送り出した。18世紀になると知識人たちの声も届いた。ジャン・ジャック・ルソーは、お膳立てされた結婚を軽蔑し、ロマンチックな愛の美德を称えた。それにまず賛同したのは西欧人の三分の一に相当する特に資産を持たない貧しい者たちである。彼らのような下層階級では、感情のまま、すなわち恋愛結婚が多かったようだ。ただし、その頃はまだ書物や教会の説教は、ロマンチックな恋愛は結婚の理由として適当でないと説いていた。

一般大衆の間にロマンチックイデオロギーが浸透し、それまで、ほとんど公認されていた婚外の言わば「不義」が否定され、恋愛結婚こそが望ましいと言われ出すのは18世紀以降である。18世紀産業革命が西欧人のロマンチックラブの情熱を掻き立てた。産業革命は生産力の画期的な増大だけでなく、生産基盤を農村から都市へ移動させた。人々は農場から引きはがされ、同時にお膳立てされた結婚を強要する家族からも切り離された。

産業革命を推進した多くの経済的、社会的な要因の結果、結婚相手も自分で選択したいと考えられるようになる。恋愛結婚の観念は新たに勢力をつけた新興富裕層から急速に拡大していく。その背景には確かに小説の力があつた。

ロマンチックラブ・イデオロギーの普及は、「貸本屋（巡回図書館）」(circulating library) が普及していく時期に重なる。

18世紀西洋の出版文化といえば、まず「小説」の流行があり、それに密接に関連する、「貸本屋（巡回図書館）」の普及と読者層の拡大といった側面が考えられる。近代家族の情愛的個人主義を指摘するローレンス・ストーンは、ロマンチックラブの概念を18世紀末～19世紀初頭に「巡回図書館の書架をいっぱいにした (Stone, 1991 : p.235)」ロマン主義的な流行小説に描かれたものであり、「小説家たちによって発明され、性的欲望の覆

西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一考察

いとして男性たちによって採用された、純粹に人為的な感情以外の何ものでもない (Stone, 1991 : p.308)」として、その文化的モデルとしての性格を指摘する。ストーン曰く、このロマンチックラブに基づく恋愛結婚は小説を読む公衆、すなわち中流ブルジョワジーから広がっていった。

書籍が高価なために個人の購入が難しかった時代、小説一冊が数ペンスで借りられる貸本屋は急成長した。大衆の重要な情報の流通拠点の役割も担うものとして、世紀末にはイギリス国内で千軒以上を数えた。貸本屋の流行は1740年頃から始まる。そして実際最も多く貸し出されたのは、まさに1740年の『パミラ』に代表される「センチメンタルノヴェル (感傷小説)」の類だった。18世紀後半イギリスで特に流行したセンチメンタルノヴェルに描かれたロマンチックな恋愛に貸本屋で本を手にする女性たちは夢中になった。貸本屋に足しげく通い、感傷的な恋愛小説に没頭する女性たちの様子は様々な形で描かれている。1775年リチャード・ブリンズリー・シェリダン (1751~1816) の劇『恋敵』(1775) では貸本屋を「邪悪な知識の常緑樹」と呼び、そこに通う女性の様子が揶揄的に描かれている。

『恋敵』の舞台は18世紀のバース。当時、金持ちの保養のための温泉地として消費と流行に浮かれていた町である。中心となるのは若い男女、ジャックとリディア。リディアは当時の流行の本をたくさん読んでおり、純粹な恋愛に憧れている。そんな彼女に言いよるジャックは、自分をビバリーという貧しい士官に偽る。リディアは、ミセス・マラプロップというお目付もなんのその、彼との駆け落ちを決意する。

ロマンスを夢見るリディア・ラングウィッシュのもとに、貸本屋の使いを任されたメイドのルーシーが戻ってくる。お使いから戻ってくる。「ほら、お嬢様。これが『難題』で、…これが『感性の涙』と『ハンフリー・クリンカー』です。それから、『身分あるレディ自筆の回想録』と、『センチメンタル・ジャーニー』の第二巻でございます」

貸本屋から戻ったルーシーはコートの下や、ポケットから、隠していた本を取り出す。

そこへ男性の接近を察知したりディアはあわてて小説を隠し、まじめな読書をしているふうを装う。

「さあルーシー、ここにある本を隠してちょうだい。早く、急いで！『ベレグリン・ピクル』は化粧台の下へ、『ロデリック・ランダム』は戸棚の中に、『無垢な密通』は『人間の義務』の中に挟むのよ…『感情の男』はあなたのポケットの中に入れて……『フォードイスの説教集』はテーブルの上に置くのよ」

この記述は、18世紀を通じて、女性が新興ジャンルである「小説」を読むことに対し、根強い批判があったことを示している。当時、説教集やリチャードソンの『パミラ』『クラリッサ』などは、社交の場としての家庭で朗読されたが、一方で多くの小説が、あくまで私室で黙読されていた。貸本屋は、本のサイズを衣類の下などに簡単に隠すことができるサイズに組み直す戦法をとっていた。

貸本屋が提供する密やかな読書は、その後も続いていく。時代は下って1830年には貸本屋からたくさんの小説を借りだす女性の姿が風刺画「貸本屋」(The Circulating Lady)として描かれている。また同じころのジェーン・オースティン『高慢と偏見』にも、いかにも時代の普遍的な価値観をもつタイプとして描かれたベネット夫人が、貸本屋で男性に声をかけられて得意になっている場面がある。

女性たちが小説を読むことは一般に困ったこととされた。それは、小説に恋愛を学んでしまうからである。1830年スタンダール『赤と黒』では、家庭教師に恋をしてしまった人妻が、修道院の女学校で厳しい教育を受け、小説を読まなかったがために、自分の気持ちが恋愛感情だと分からない様子が描かれている。

西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一考察

「人は噂になった恋愛を耳にしない限り決して恋に落ちることはあるまい」とフーコーが言うように、恋愛感情とはどういうものか知って初めて恋愛ができるのである。感情は学識を持つ文化的な期待感の所産ともいう。恋愛感情は、小説という装置によって理想化されたのだろう。それが証拠に、巡回図書館の書架は恋愛小説の類で埋め尽くされたとき、初めてロマンチックラブが有産階級の間で結婚の動機として考えられるようになったのである。

イギリス：女性読書への批判

小説という文学のジャンルが形成された18世紀のイギリスでは、産業革命の発達と植民地からの膨大な富の流入によって中産階級が勃興し、それに伴う女性の余暇時間の増大と教育水準の向上により、小説の読者層が形成された。その結果としてジョン・ロックの『教育に関する諸考察』や、サミュエル・リチャードソン、そしてダニエル・デフォーなどの作家たちにより女性の教育について論じられた。そこには小説からの悪影響を懸念する声、そして作家に道義的責任の自覚をもとめる議論も聞かれた。

女性たちの読書とその影響を常に注視していたもうひとつが新聞である。18世紀は新聞の創刊が相次いだ。『英国新聞の百科事典』によればロンドンだけで1790年には22紙、1811年には52紙に増えている。発行部数もイングランド地方全体で、1713年に1日あたり250万部であったものが、1750年730万部、1775年1260万部、1801年1600万部と急激に伸びている。

18世紀ジャーナリズムの世界には、『ロビンソン・クルーソー』（1719）のダニエル・デフォー、『ガリバー旅行記』（1726）のジョナサン・スウィフトが登場した。両者ともに小説家として有名だが、デフォーは「英語によるジャーナリズムの父」とも呼ばれている。何より文章の「わかりやすさ」に定評のあるデフォーは「完璧な文章の様式とは」の問いに「あらゆる

る階級の様々な能力の人間だれにも理解できるもの」と答えている。すなわち身分を問わず広く大衆に向けて書いたということである。デフォーは当時にして進歩的であり「リベラル」とみなされていた。が、それでも、情欲に駆られての結婚は、狂気、自暴自棄、家の没落、恥辱、自殺、私生児殺しなどをもたらす可能性があるかと警戒している。スイフトも1723年の段階で、恋愛は「劇や物語の中以外ではありえない、ばかばかしい激情である」という見解を示した。

ただし、デフォーは1727年において「お金と処女膜がわれわれの熟慮の主題」とし、「いかに多くの結婚が行われようとも、そこには友愛といったものがほとんど見られない」現実を問題視している。彼は「妻が家庭において高級な使用人としてこき使われる」ような結婚を否定し、愛情に優劣はなく、相手に対する尊大な要求も、強制的な服従も求めるべきではないと主張した。

この時期、報道より、文芸批評紙として特に注目されていたのが後にバーネットが「A Lady of Quality (1896)」でまねたジョーゼフ・アディソンとリチャード・スティールが編集する「タトラー (1709～)」(正確には週三回発行された雑誌)そして「スペクテイター (1711～)」である。そもそも当時の新聞は、全般に事件の客観的報道よりも、政治、経済から流行、そして文学をテーマに、不特定多数の読者を啓蒙する意味合いが強かった。「スペクテイター」や「タトラー」は、当時雨後の筍のごとく開店したコーヒーハウスに置かれ、そこにたむろする大衆がコーヒーを片手に読むものとなった。

その「スペクテイター」に1712年小説に描かれる「半ば芝居じみた、半ばロマンチックな求婚行動の流行が現実の人間生活においては望むべくもないような事柄についての我々の想像力を掻き立てることになる」という不満の記事が掲載された。

女性誌の見方も同じである。1773年英国の婦人向け月刊誌The Lady's

西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一考察

Magazineは「いまや数多ある趣味の悪い小説を読んだことのない女性はひとりもいない」と、女性の読書の実状を懸念している。

1799年The Ladies Monthly Museumにも「女性は小説しか読まない」「一日に何度もメイドを図書館にやって、借りてくる本といったらExcessive-Sensibility、Refined delicacy、Disinterested Love、Sentimental Beautyと Sentimental Novel」すなわち感傷小説を読みふける女性を批判している。

18世紀以降、女子教育の普及とともに、女性は男性に対して自信を見せ始める。1790年女性誌The lady's magazine (ザ・レディス・マガジン) は、「今日ではシェイクスピアの時代に比べると、遥かに良質の教育を多数の女性たちが受けている」「男子は、グラマースクールで、ラテン語やギリシア語を教えられているが、実際的なことは、女子のほうが精通している」と記されている。一方、男性誌においては、女性の変化を認め、身構えるような言説も認められる。ただし、男性中心主義的な近代化の機運の中で、おりしも社会の都市化は、職場と家庭の明瞭な分離をもたらし、男性と女性の役割の分担（という名の男性の社会的優位）を促進した。その結果、女性は家庭にあって信仰と道徳を守る、経済的には男性が優位であるが、道徳的には女性が優位であるという了解、近代社会の性的な分業シフが浸透した (Stone, 1991 : p.56)。1791年『ザ・ジェントルマンズ・マガジン』(The Gentleman's Magazine) には、「女性は高い地位を主張し、また、知性の自然的平等性に挑戦するようになっている」と警戒の色も見える。

女性は家庭の天使たらんことが望まれ、多くの女性は、すすんでそれを受け入れた。自ら家庭に生きることを自覚した女性たちが、恋愛と結婚の物語に夢中になったのは当然である。だが、女性たちが夢中になるほどに、

四
五

そうした小説は、女性たちの心を惑わし、いたずらに想像力を刺激するものとして嫌悪された。18世紀以降、絵画にも「読書をする女性」が描かれたが、それらには「小説読書による墮落への警告」の意図があったようで

ある。近代の女性の読書行為に対する社会の眼差しは、女性の目が開かれていくことへの抵抗感とともにあった。それは恋愛に目覚めることへの懸念であったともいえるのではないだろうか。

センチメンタリズムの効果

感傷的な小説は中産階級の好みに合わせることで実用的な目的、すなわち啓蒙しようという意図があった。

センチメント (sentiment) とはこの場合「世の中のさまざまな事物に共感できる洗練された感受性」を意味する。18世紀はsentiment、sentimentalism、sensitivityという言葉が好んで使われた。

イギリスの文学における感傷主義の流行は、啓蒙主義運動による人間感情の重視という思想から始まり、18世紀後半における感傷的女性像の確立を経て、19世紀に大衆化され「涙の文化」として頂点に達し、その世紀末に終わりを迎える。18世紀の感傷主義に関して、マイケル・ベル (Michael Bell) は、文学テキストにおいて「感傷」(“sentiment”) という用語には「道徳的規範」(“moral principle”) と「感情」(“feeling”) という二つの意味があると指摘する。これらは一見矛盾するように聞こえるが、この時代の感傷的女性像にとって重要な特徴である。

一般的に、社会における男女性別役割の確立とそれに伴う女性の家庭への囲い込みが定着したのは19世紀ヴィクトリア朝と考えられているが、ベルは、すでに17、18世紀において女性が家庭における道徳的規範であることが求められていたことを指摘している。17世紀後半には結婚、家庭、子どもという家庭的価値観が上層中流階級において意識され始め、18世紀の後半には家庭的な女性を理想とするジェンダー・イデオロギーが誕生していたと述べている。すなわち、18世紀には家庭において道徳的な模範となることが女性の役割であり、しかも「感傷的であること」がその価値を高め

西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一考察

ていたというのである。

何よりも感傷的女性像にとって最も重要なものは「感情」である。18世紀という時代において求められたのは、激しい感情の発露であった。すなわち、この時代の感傷的女性像とは、抑圧された状況にある女性が激しい感情を表現している様子を写した姿であり、彼女は自分の道徳観が危機に晒されるとき、苦痛、苦悩、悲しみを言葉を尽くして表現する。それが当時の女性に求められた女性性であり、また、家庭領域の中心的存在として当時の家庭の道徳的価値観を体現する方法だったのである。その意味で、18世紀のサミュエル・リチャードソンの女主人公パメラやクラリッサは、まさしくこの時代の感傷的女性像の典型である。リチャードソンで刺激された女性たちのセンチメンタリズムの感情は、18世紀後半『感傷の人』でさらに盛り上がった。読書の世界において感傷的女性像のステレオタイプが出来上がり、定着していったのである。感傷主義が女性たちを読書に向かわせ、読書が感傷主義を強めるという形で、強化されて行った。

やがて、ヴィクトリア期においては、理想的女性像は「家庭の天使」と呼ばれ、天使のような女性は、静かで、か弱く、自己犠牲の精神を持ち、何よりも純粹無垢で、慎ましいことが求められ、激しい感情を抱いたり、表現することは厳しく抑制されたりした。

そうした現実の中で、文学テキストはますます感傷性を強めていったのである。

アメリカにおいても18世紀から19世紀にかけて、感傷小説が流行した。最初に読者の歓心を買ったのは、道徳的に失敗した女主人公の破滅の物語、『シャーロット・テンプル』(1794)やフォスターの『コケット』(1797)であった。いずれも自由恋愛を試みた女性を描いたものだが、最後は自ら誤りと後悔し、死という悲劇的結末を迎える。これらは『誘惑小説』とも言われ、男性の誘惑に負けた女性の姿を反面教師として描いたものとされた。

『コケット』について平石貴樹『アメリカ文学史』では次のように説明されている。

当時すでに現実の世界では自由恋愛を目安として「近代人」とみなしうるような女性が存在したこと、しかもそうした女性を、一貫した人物像として理解することも可能だったこと、ただしそのような女性に対する最終的評価は「わがまま」であり「自業自得」であり、近代的な独立心は道徳的規制の下で断罪されねばならなかったこと、これらのことを意味するように思われる（平石，2010：p.62）。

平石は、女性が恋愛において自分の意志を貫いた結果としての不倫を、結末に大きく後悔するという『コケット』のプロットを勧善懲悪とみなしている。

「誘惑小説」は中産階級の若い女性たちに対し、自由恋愛を戒める、道徳のテキストともいえる。そこに読み取れるのは女性が、自我に目覚め、父権制社会のルールからはみ出した振る舞いをすれば罰せられるという教訓である。

アメリカでは、この後19世紀も半ばごろから、それまでの「誘惑小説」に代わり、「父権制社会から見て望ましい女性が、いかに苦境を乗り越えるか」というプロットが流行する。スーザン・B・ウォーナー『広い広い世界』に代表される、「家庭小説」である。「家庭小説」では、不幸な生い立ちのヒロインに救世主が現れると言う形でハッピーエンドが用意される。すなわち喜劇においてキリスト教的教訓が示される、ということである。

実際、ウォーナーの『広い広い世界』の読者層の拡大の背景には、強い信仰心の女性主人公が困難に打ち勝つこの小説が政教分離の国家にあって民衆の心をつかもうとした福音主義プロテスタンティズムにより、女性の

西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一考察

指南書として推薦されたことがあった。

19世紀アメリカにおいては、イギリスのヴィクトリア朝のモラルの規範がアメリカに文化移入された。アメリカにおいては本国イギリス以上にアメリカの社会不安を反映、人々を縛った。女性の視点からいえば、まず、家庭の頂点にある父親のもとに家族の秩序が保たれているという家父長制度が前提としてある。そして、家族の秩序とは結婚制度を基礎にしている。女性とは家庭の天使であって、家庭の中で母として自己犠牲を払い、妻として夫に尽くすのが理想の女性だという考え方が、19世紀のアメリカでほぼ完成されたヴィクトリアニズムでの女性の生き方となった。

国家秩序の安定のためには家父長制が必要だった。

自己の固有の権利に目覚めた個人が発生することは、家族共同体にとつてのみならず家族共同体の拡大と説明された家族国家の体制にとつても最大の脅威だったからである（磯野，1958）。

家父長制下の結婚の結末をハッピーエンドとする家庭小説は、社会的理想を女性自身が希望する、確かに「主人公が自分の属する社会に包摂されるプロット」である。

19世紀アメリカにおける家庭小説を論じたジェイン・トムキンズは、『扇情的な意匠（1986）』において、「家庭小説」「感傷小説」は当時の女性の美德や規範をあらわすジャンルであると同時に、女性の自立や家父長制への抵抗をも示唆している点を指摘している。

アメリカにおいても、感傷性の強い小説は警戒され、否定された。そして、それらが女性の書くものとなったことで、さらに、その警戒の眼差しが強まっていったのである。

センチメンタリズムの流行の結果、いたずらに憐れみを誘い情緒をかき立てる効果を多用し、不幸な境遇に陥った美德の人を憐れむ自分の豊かな感受性に耽溺するといったタイプの、極度の感傷趣味に走る文章も多く現れた。やがて後半にはsensationと言う言葉に代わる。

西洋では、センセーション小説は1860年代初頭のヴィクトリア朝イギリスにおいてにわかに流行し、その流行は当時の多くの雑誌記事において大いに議論され批判された。“sensation novel (fiction)” という用語自体は1860年頃から雑誌記事に見受けられるようになるのだが、1850年代の雑誌記事に目を向けると、“sensation” という言葉がすでに流行語のように扱われていたことが見えてくる。E. S. Dallasは、センセーション小説の流行を引き起こした Wilkie CollinsのThe Woman in White (1859～1860) が連載されるよりも半年ほど前に、Blackwood’s Edinburgh Magazineの記事において “we should fly thought, we should cultivate sensation” と述べている。

センセーション小説の先駆的者であるCollinsはThe Woman in White (1859) が雑誌に連載されたころCharles Dickens編集の雑誌Household Wordsのスタッフとして執筆していた。Dickensは中産階級向けの雑誌の編集責任者としての立場から、常日頃Collinsの道徳に対する挑戦的な姿勢を警戒していた。1858年9月24日の副編集長W. H. Willsへの手紙で「Collinsの記事によく目を通して中産階級読者を不必要に刺激するような箇所が残らないように」と指示を与えている (Oliphant, 1862)。

sentimentalismはsensationに変わると、社会の目線は一層厳しくなっていた。だが女性たちにとって、読書は現実社会からの逃避でもあり、厳しいまなざしの中で、密かに楽しむ読書は、同じ立場の女性たちの連帯性を生むものとなっていったのである。

女性作家の家庭小説

『パメラ』はイギリスで出版された四年後には (1744年) アメリカで出版され、アメリカでも大いに評判を呼んだ。アメリカの作家たちは大いに影響を受け、『パメラ』に倣った恋愛小説の類を書き始める。それが1850

西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一考察

年代の女性作家の家庭小説であり、ホーソーンのロマンスである。

今だ清教徒的な倫理観が横溢していたアメリカにおいて、イギリスで批判された感傷的なロマンス小説が受け入れられたのは、一つに、『パメラ』が教訓的な実話の風であったことが考えられる。『パメラ』は、もともと作者リチャードソンが女性のための実用書を意図したものである。アメリカにおいては、その「教訓性」が歓迎されたのであり、ヒロイン、パメラの貞操を固守する姿勢も「見習うべきもの」であったと思われる。

それは、女性作家の家庭小説に、そしてホーソーンのロマンスにも示されている。

アメリカの女性作家の家庭小説の基本プロットは、健気に生きる女性が困難を乗り越え幸福な結婚に至るというものであり、いわば『パメラ』がそのまま踏襲された形である。ただし、それは女性の美徳の真髄として崇拜されていた宗教観を教示するものとみなされた。大人気を博した『広い広い世界』は、聖書のフレーズを幾度も引用し「人生の教科書」としての『聖書』を世に広めるかのような趣である。

『広い広い世界』出版の2か月後、婦人雑誌Godey's Lady's Book 1851年2月号では以下のように宣伝されている。

どのページにおいても過剰な感傷の描写における大げさな言葉により読者を魅了しようとするよりも現実世界における有益な教訓を教え込もうとする作家の熱意が込められている（注1）。

19世紀半ばからアメリカで隆盛を誇った女性たちの家庭小説の要諦は、ヒロインが、それゆえに降りかかる数々の困難を強い意志と信仰により乗り越え、最終的に自らを中心とした家族を築き幸福になるところにある。家庭小説とは家庭の構築を目的とするものである。

近代の性別役割分業社会で、女性の多くは経済行為を男性に託し、余暇

時間に読書という行為によって心の豊かさを求めた。中には家庭にいながら自ら収入を得ようとする者もいたが、そうした女性の中から女性向けの文学の供給者すなわち作家になる者が現れた（進藤，2001）。恋愛や結婚といった話題は、家庭で生きることを強いられた女性たちにとって最大の関心事であり、なおかつ、小説ジャンルの読者は主に女性であった。性別による区別が明確化した社会において、家庭で生きるしかない女性読者が同じ「女性」が書く家庭が築かれる家庭小説に夢中になったのは当然である。女性たちは家庭小説に既定された社会の枠組みのなかで幸福になるための術を求めたのであろう。

ホーソーンのロマンス

19世紀、恋愛や結婚が女性向けの感傷小説に特有の話題と考えられていたときに、そうした区分に自分なりに挑戦したのがナサニエル・ホーソンである（平石，2010：p.204）。

ホーソン『緋文字』は、『パメラ』が取り上げた「貞操」の問題を別の形で提起した。また圧倒的な人気を博していた女性作家の家庭小説に対しても、恋愛と信仰と言う同じテーマを全く違うものとして提示した。

ホーソンは女性作家の感傷的な「家庭小説」が圧倒的な人気を博すなかで恋愛と信仰を扱った『緋文字』を提出した。感傷小説が流行した時代は、フランス革命の影響でキリスト教の基盤が大きく揺らいだ時でもある。宗教はアメリカの小説において重要な課題であり、爆発的に売れた女性たちの小説においても意識された。結果『緋文字』は売れ行きとしては、同時代の女性作家に遠く及ばなかったわけだが、なにより同じテーマを扱っているようで、それは女性作家たちの「家庭小説」とは明らかに異質なものであった。

『緋文字』は、恋愛と結婚を扱いながらも「家庭小説」とはされていない

西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一考察

い。「家庭小説」主に少女の教訓のために書かれた女性の手になるものである。

『緋文字』を恋愛と結婚をテーマとする小説という枠において見るなら、それは女性作家による同種のものとは何が違うのだろうか。

『緋文字』は17世紀ピューリタン社会ボストンが舞台だが、作品が執筆された19世紀の中産階級的な「家庭主義」の理想が認められることは、研究者によっても指摘されている。

たとえば女主人公ヘスターと、その愛の相手、牧師のディムズデールの関係は、19世紀的な、歴史学でいう「ロマンチックラブ」に基づいた結婚を体現しているという見解である (Herbert, 1993)。

また、当時勃興しつつあった中産階級の家庭主義のイデオロギーと結びつけた見方もある。ヘスターとパールの描写は、父親不在の家庭で母親と娘の関係を描いた当時の家庭小説 (domestic literature) にも見られるものであり、ヘスターの子育ての仕方や共同体への献身的な奉仕、ディムズデールの「女性性」への敬意などは中産階級的と論じたものもある (Gilmore, 2004)。

研究者の指摘にある通り、『緋文字』は1世紀の前近代的な清教徒社会ボストンを舞台としながらも、19世紀の中産階級的なロマンチックラブを基礎とした「家族」(ヘスター、ディムズデール、パール)を描いた、時代錯誤的な小説といえる。ホーソーンは、この近代的な「家族」をピューリタン社会と明瞭に対比させている。

ヘスターは、時代にして驚くほど進歩的な女性である。自由を愛し、情熱を信じ、ロマンチックラブを肯定している。彼女にとっては、むしろ愛してもいないチリングワースと結婚してしまったことこそ過ち「恥ずべき犯罪」であり、愛するディムズデールとの契りを神聖なものとしている。一方、ディムズデールの方は、自分の良心と牧師という社会的立場とのあいだに板ばさみになり、罪の意識にさいなまれる。最後、ディムズデール

が死ぬ場面で、来世での一体化を求めるヘスターに対し、ディムズデールは自分たちが「法を犯したこと」や「神を忘れたこと」を強調し、そのような二人の一体化を願う虚しさを説いて息絶える。

ヘスターとディムズデールの違いは、ロマンチックラブと信仰に対する見方の違いともいえる。ヘスターの夢見る家族像は、夫婦間、親子間の愛情に基づいた核家族であり、19世紀前半の中産階級的な新しい家族の理想像である。これは同時代の女性作家の家庭小説に望まれるものと同質のものといえる。家庭小説においては女主人公はロマンチックラブと信仰を両立させ幸福な結末を迎える。だが『緋文字』においては本来、理想の家族像の基礎になるはずのロマンチックラブが姦通を生み出したかどで罰せられる。恋愛は成就しないのであり、最後まで家庭が築かれない。女性たちの家庭小説に対して、ホーソーンは家庭が破壊される小説ということである。

この時代アメリカの小説においてはキリスト教道徳から離れることはできなかった。宗教道徳は読者の日常的な関心事であり、とりわけ女性作家は小説家という正体不明な立場よりよき道徳家としての評価を求めたむきもあった。そうした中で女性作家の作品においては、道徳的なヒロインのロマンチックラブが神の力でかなえられるという方向で肯定された。それに対してホーソーンは、「自由を得た人間は罪を犯す」という方向で考え、自由恋愛を求めたヘスターを神の前に敗北させたのであり、ロマンチックラブは否定されている。ホーソーンはノヴェルより自由なものとしてロマンスを書くと言った。が、彼の自由意思の探究には、その危険性に対する警戒心が見て取れるのである。

19世紀のアメリカの小説について平石貴文は次のように述べている。

アメリカ小説は主題をキリスト教にゆだねたまま、日常生活や恋愛を
あつかってリアリズムの形をととのえていく女性作家と、それ以上に

西洋女性の読書に見るロマンチックラブの一考察

重要主題を引き受けるが、リアリズムに回帰することのできない男性作家たちとの、奇妙な並行関係を目撃することになった（平石，2010：p.60）。

19世紀の女性の小説のリアリズムとは、その社会制度の枠内で、より自己満足できるように教えるものであった。その意味で、その幸福の追求の仕方が男性とは違ったのである（Szabo, 2009）。

女性の小説は、男性中心社会における、女性自体の抑圧の歴史と共にあった。そして、その抑圧されていると言う状態こそが共感の源となって読まれてきた。その、ある意味、社会の被害者たる意識こそが、作家と読者、そして読者同士の連帯感を生み出してきたのである。それは日本においても全く変わらない。その点において、国境を越えてつながっている。

平石は、「やがて小説の読者層に男性が参入してからも、相変わらず小説の中心的な興味は、恋愛と結婚に集中し続けたから、近代小説における女性的な特質や関心は、どんなに強調してもしすぎることはない」と言っている（平石：p.209）。

女性の小説の読者は主に女性である。女性の読書は女性の共同体を形成し、そこからまた作家が生まれ、読者が生まれると言うサイクルが確立されてゆく。ロマンス小説は、その流れの中に生まれたのである。これは女性のジャンルに共通するものであり、日本の女性たちも同じ道を歩むことになるのである。

引用・参考文献

安形麻理・石川透・上田修一・田村俊作・瀬戸口誠 2006『読書. 史の中の読書画像』（於第54回日本図書館情報学会全国大会, 資料PDF）

磯野誠一・磯野富士子1958『家族制度—淳風美俗を中心として—』岩波新書

清水一嘉 1994『イギリス小説出版史 近代出版の展開』日本エディタースクール出版部

進藤鈴子 2001『アメリカ大衆小説の誕生』彩流社

国際日本学論叢

- 新倉俊一 1998 『ヨーロッパ中世人の世界』 ちくま学芸文庫
- 原野昇 2007 『フランス中世文学を学ぶ人のために』 世界思想社
- 増田四郎 1970 『西洋と日本—比較文明的考察』 中央公論新社
- 水野尚 2006 『恋愛の誕生』 京都大学学術出版会
- Capellanus, Andreas., 1993 『宮廷風恋愛について—ヨーロッパ中世の恋愛術指南の書』 瀬谷幸訳 南雲堂
- Denis de Rougemont, 1993 『愛について』 鈴木健郎・川村克巳訳 平凡社
- Engelsing., Rolf, 1985 『文盲と読書の社会史』 中川勇治訳 思索社
- Finkelstein, David; McCleery, Alistair 1999 『読書の歴史：あるいは読者の歴史』 原田範行訳 柏書房
- Lewis, C. S., 1972 『愛とアレゴリー』 玉泉八州男訳 岩波文庫
- Ovidius Naso, Publius., 2008 『恋愛指南—アルス・アマトリア』 沓掛良彦訳 岩波書店
- Roger Chartier, 長谷川輝夫, 宮下志朗 1994 『読書と読者—アンシャン・レジーム期フランスにおける』 みすず書房
- Stone, Lowrence, 1991 『家族・性・結婚の社会史—1500年—1800年のイギリス』 北本正章訳 勁草書房
- Capellanus, Andreas., 2011, *The Art of Courtly Love (Records of Western Civilization Series)*, Columbia Univ Pr; Revised 版
- Oliphant, Margaret., 1862, *Sensation Novel*, *Blackwood's Edinburgh Magazine* 91
- Gilmore, Paul., 2004 *Romantic Electricity, or the Materiality of Aesthetics*, *American Literature* 76 467-94.
- Herbert, T. Walter., 1993 *Dearest Beloved The Hawthornes and the Making of the Middle-Class Family.*, Berkeley: U of California
- Lewis, Clive Staples., 1985, *Allegory of Love: A Study in Medieval Tradition*, Oxford Univ Pr
- Szabo, Anna., 2009, *19TH CENTURY GIRLS' LITERATURE: STORIES OF EMPOWERMENT OR LIMITATION?*, Georgetown University

(注1) The Wide, Wide World. Advertisement. Godey's Lady's Book 42 (1851) p202

The Consideration of the Romantic Love upon Women's Reading Novels in the English Language Countries.

Kazuyo Motoi

Abstract

The romance novel or romantic novel is a literary genre. The history begin Samuel Richardson's popular 1740 novel "Pamela, or Virtue Rewarded". Now romance fiction comprises 48.8% of all popular paperback fiction sold in North America. This genre is popular in Europe and Australia, and translated in 90 languages. Romance novels place their primary focus on the relationship and "romantic love" between two people, and must have an "emotionally satisfying and optimistic ending.

How the meaning of the "romantic love" is understood by women?"

For the purpose of studying the genre "Romance", this article pursues the effect and influence of mainly women's reading upon the understanding of "romantic love" in the English Language Countries.